

百卅一人が要注意

熊大 水俣病研究班が報告

告会で、席上第一内科の岡島透講師は「現地の実態調査の結果、現在水俣病の要注意者が百三十一人いる」と発表して注目された。

第一内科教室では、三十五年夏から三回にわたって水俣病の発生がもっともひどかった同市袋地区の実態調査を行なった。調査は神経の障害程度について二十五項目にわたってアンケートをもとめる問診法によって行なわれたが、千百五十二人のうち、百三十一人（全体の二・三％）が、水俣病と同じような言語や聴視力の神経障害者であることがわかった。調査後この要注意者のうち、症状のひどかった二十四人から、三人の水俣病患者が新たに出了たという。

また同教室が行なった調査は、地元民の六一・九％で、地元民全部を検診した場合、要注意者はさらに増加する見込みだという。

水俣病の研究現況報告会が十七日の教授や学生など約五十人、三十

午後一時から熊大医学部第二講義一年一月から学部を設置されてい

室で行なわれた。出席者は医学部る「熊大水俣病研究班」の研究報